

第四十四回（令和六年度）

座間市中学生の主張作文コンクール入賞者作品集

中学生の主張

座間市青少年問題協議会

は　じ　め　に

座間市青少年問題協議会会長

座間市長 佐藤 弥斗

次の世代を担う青少年が、一人ひとりの役割と責任を十分に自覚し、心豊かで逞しくそれぞれの夢に向かって成長していくことが私たちの心からの願いです。

青少年が成長していく過程において、人との交流や奉仕活動をはじめとする多彩な体験活動ができるように、家庭・学校・地域が連携して社会環境を整備し、青少年の自立心の醸成と健全化などに取り組むことが最も重要なことでもあります。この一環として本年も、座間市青少年問題協議会では、第四十四回「中学生の主張」作文を募集いたしました。中学生が日常生活の中で様々な体験を通して将来の希望や大人への提言などを表現し、素直な気持ちで語られていることに深い感銘を受けました。多くの中学生から応募をいただき、その積極的な姿勢を高く評価いたします。この作品集が多方面で活用されることを期待しております。

最後に、本事業の実施にあたり、ご多忙のところ、ご協力をいただきました各中学校の先生方、並びに審査にあたられた皆様に厚くお礼申し上げます。

第四十四回座間市中学生の主張作文コンクール入賞者

市長賞

「振らないバットは当たらない」

相模中学校三年生

高橋 遼馬

議長賞

「大人になるということ」

西中学校三年生

石原 美咲

教育長賞

「まだ反抗期じゃないんです」

西中学校三年生

中村 美結

佳作

「国際化を考える」

西中学校二年生

今井 優

「リセットの合図」

西中学校三年生

齋藤 有壱

「これからの人生を創る」

西中学校三年生

中村 太亮

「挨拶」

東中学校二年生

華山 彩結

「その一瞬を駆け抜ける」

栗原中学校一年生

土屋 美月

「障害者を当たり前に支える社会の実現」

栗原中学校二年生

グレアム 紗里

「過去を忘れず未来を守る」

栗原中学校三年生

保延 由花

市長賞

「振らないバットは当たらない」

相模中学校三年生 高橋 遼馬

中学三年生——もうそんなところまで来てしまったのか、というのが僕の正直な心境だ。義務教育も今年で最後となり、そろそろ、進路についても真剣に考え始めなければならぬだろう。受験も、あと半年後に迫っている。

この中学校三年間、ありがたいことに、僕は多くの役員の仕事を任されてきた。自分で言うのも何だが、僕のような適当な人間がよくここまでやってこれたなあと、誇らしい気持ちにもなる。その中で、僕が特に印象に残ったものを二つ、お話ししたい。

まず一つは、二年生の一学期に任された学級委員だ。実を言うと、この仕事は進んで引き受けた訳ではなく、最初は「何で自分がこんな面倒な事をやらなければならないんだ」という不満が、僕の心に渦巻いていた。また、日々の仕事量の多さや、クラスのリーダーとしての責任の重さに、僕は何度も打ち負かされそうになった。同時に、リーダーとしての素質が無い自分を呪った。

それでも僕が任期を満了できたのは、他でもない、クラスメートや先生方の助けがあったからだ。彼らは、肉体的にも、精神的にも追い込まれていた僕を救ってくれた。僕は以前、悩みや面倒事を一人で抱え込みがちだった。人に助けを求めることは、自分にとって恥だと思っていたからだ。だが、その虚勢も一瞬にして

崩れ去った。僕は学級委員を務めて、自分がいかに人の支えなしには生きていけないのか、身を持って思い知らされた。

学級委員の任期を終えて三ヶ月後、クラスメートが次期生徒会長に立候補するため、僕はその応援責任者を任されることになった。これは、僕の想像を遥かに上回る激務だった。応援責任者は、立候補者と選挙活動を共にする、いわば保証人のようなものである。選挙期間中は、学校の中庭で朝のあいさつ運動を行ったり、帰り学活前には、各クラスを周って応援演説を行ったりと、かなり多忙な毎日だった。特に朝のあいさつ運動は、僕が朝早く起きるのに不慣れな上に、選挙期間中はちょうど冬入りも間近であったため、体には相当堪えた。

十二月八日——僕はついに、投票日を迎えた。投票の直前には立会演説会を控えており、ここでの演説が、皆の票を集める最後のチャンスとなった。そして、僕達の番まであと一人に迫ったとき、これまでには味わったことのない緊張感が僕を襲った。心臓の鼓動は速まり、もう十二月だというのに、背中を数滴の汗が流れ落ちた。だが、僕の心に「不安」という感情は微塵も無かった。選挙期間中、僕は誰よりも早く、誰よりも欠かさず、誰よりも沢山の人に、朝あいさつをしてきた。この努力はきっと、いや、必ず実を結ぶはずだ。そう考えると、緊張とは裏腹に、僕の心には強い「闘志」と、負ける訳が無いという確固たる「自信」が芽生えた。

その後、僕は無事に最後の演説を終えた。開票の結果、二位と圧倒的な差をつけて、見事生徒会長の当選を果たした。当選を知ったとき、ひとまず安堵した。だが、その何万倍もの喜びが僕の心を満たしていた。

僕にとって、役員の経験はその一つ一つが刺激となり、中学校生活を思い出深く有意義なものにしてくれた、かえがえのないものだ。

その一方、僕はこの三年間、疑問を抱き続けていることがある。それは、役員の決め方についてだ。他の中学校がどういう決め方をしているかは知らないのだが、僕が通う相模中学校では主に、「クラス内での推薦」で役員を選出している。僕も、大半の仕事は推薦によって任されてきた。

推薦という方法は、「〇〇にやってほしい」とか、「〇〇ならできる」という、人間の私情や勝手な思い込み（主観）に基づいたものである。そのため、同じ人が何度も役員に選ばれがちになり、役員に挑戦したくてもできない人や、一度も役員を経験せずに中学校を卒業してしまう人が出てくるだろう。これにより、推薦に選ばれやすい特定の人だけが、自身を成長させる機会を多く与えられ、そこに大きなアドバンテージができる。誰もが上る人生の階段「中学校」の場に、このような差は生まれてはならないのではないか。

僕は、生徒や先生方などの学校関係者は、「誰もがやりたいことに挑戦できる学校づくり」を今以上に進めていき、生徒一人一人の自主性をもっと重んじるべきだと思う。都合の良い主観で人を判断するようなことは、決してあってはならない。

そして何よりも大切なのは、僕達学生が自らの可能性を否定せず、与えられたチャンスを最大限生かすことだ。せっかく打席（チャンス）が回って来ても、振らないバットは当たらない。これからの座間を、日本を担う一人の人間として、空振り（失敗）を恐れれない、前向きなチャレンジ精神を僕は大事にしていきたい。

議長賞

「大人になるということ」

西中学校三年生 石原 美咲

大人とはどんなものなのか。中学3年生になって、将来について考えることが増えた今、私が考えていることです。ニュースでは、悪質な事件が毎日取り上げられ、その度に「私は将来、正しい大人になれるのだろうか」と思います。先が見えない現代、社会人となった自分の姿が今でも想像できず、不安なことが多いです。

私は、近所の方には自分から挨拶をするようにしています。挨拶をすることで、自分にとっても、相手にとっても心地の良い空間を作ることができると思うからです。ですが、挨拶を返してくれない人が最近が目立ちます。その中でも、特に高校生か大学生くらいの若い人が目に付きます。完全に無視するという人は少ないのですが、軽い会釈程度の人も多くいます。また、イヤホンを付けていて、声が聞こえていなかった人もいました。閉鎖的になった社会生活において、挨拶はとても大切なコミュニケーションの一つだと思います。仕事などでもそれをないがしろにすれば、関係性は薄くなり、周りを気遣わない行動はやがて自分に返ってくると思います。身近なところの些細なことでも、「大人」として責任を持たなければならぬときが今後やってきます。来たるその日に備えて、周りをないがしろにせず、いつでも思いやりと

責任を持った行動をするのが、今の私達に求められていることだと感じました。

ある時、友達とコミュニケーションセンターに行ったとき、「大人」と「子供」という表記を見つけました。入館する際に書く書類にあったものでしたが、私は迷ってしまいました。中学生という微妙な年代を表す言葉がどちらか決めかねてしまったからです。「大人じゃない？もう大人でしょ？」と意外な言葉がセンターの人から返ってきて、私は驚きました。当然のように職員の方が言った「大人」という言葉に、少しの怖さを感じました。今まで未成年の子供として扱われてきて、なんの不自由もなく生活してきました。ですがこれから、義務教育の壁を抜けて、高校生という新たな世界に入ることになります。社会の一員となる「大人」という言葉には、責任の重みが大きくあり、背筋が伸びる思いでした。

身近なところには様々な大人がいます。私達の生活は大人によって成り立っています。学校で学ぶことができるのも、部活動ができるのも、大会に参加できるのも、生きることが出来ているのも、全て大人のおかげです。小学生の頃まではそのことに「感謝する」だけでした。

ですが中学校の最高学年となった今は「自分のこれからを考える」ことも重要になるのだと思います。支えられる側から支える側へと変わっていく今後の数年間をどう過ごすか。漠然と「大人」になっていくことに対する不安を持つだけでは現状は何も変わりません。高校進学から大人への道は大きく変わると思います。今の自分の選択に未来の自分がかかっているということを、大人について詳しく考えているうちに気づきました。

私は将来、人を幸せにして笑顔にできる大人になりたいです。無難な結論になるかもしれませんが、私は人を傷つける大人にはなりたくありません。挨拶のように些細なことでも、周りを見ず、見て見ぬふりをするような大人にはなりたくありません。笑顔にも様々なものがあります。人をあざ笑うものもありますが、優しい気持ちによつて形作られる笑顔もあります。常に正しい行いをし続けるのは難しいことかもしれませんが。ですが少なくとも、心がけることによつて周りが良い方向に変化していくことはあると思います。

「大人」とは難しい言葉です。一般的に成人と同様の十八歳で使われることが多いですが、十六歳や二十歳など、範囲は幅広いものです。大人と呼ばれ始める私達も、心はまだ未熟です。年齢や経験を逃げ道にせず、自分のことは自分で判断して行動できる大人、自立し自律できる大人になっていきたいです。

教育長賞

「まだ反抗期じゃないんです」

西中学校三年生 中村 美結

皆さんには「反抗期」というものはあっただろうか。私の反抗期は来ているのか、来ていないのかわからない。私の中ではこの話題を出すぐらいなので、まだ反抗期は来ていないし、これから来ないと信じている。ではなぜわからないのかというと「もう反抗期来ちゃったか」「反抗期だからしょうがないね」と周りから主に家族から言われるようになってしまったからである。

それは中学校に上がる前から思えばそうだった。家族は、大人たちは反抗期という言葉に結びつけて私達を「反抗期の中学生」というひとつのくくりに入れようとする。

果たして、少し「そんなことなくない？」とか「しつこく言い過ぎだよ」「わかったよ」という言い方や返答を私がしただけで私達は簡単に「反抗期」になってしまうものなのだろうか。

あるサイトでは反抗期は平均的に10〜13歳にかけてだと言われているに更に女子は早く来ることが多いとか、高校生ぐらゐまで続くのが最近の子だとか書かれていて、見ていてただただ不思議でたまらなかった。小学校中学年くらいから反抗期は家族の間でよくないものとして共通認識されていたし、来るのが少し嫌だった。なんで反抗したくなってしまうのだろうと不思議に思っていた。テレビやサイトで思春期・反抗期の娘と父親の洗濯物

問題や、関わり方などを横目に見ながら、いざ中学校に上がると周りのクラスメイトの一部から「親と喧嘩した」、という声を聞くようになった。しかし、その話を詳しく聞けば昔聞いていた反抗期像とは違う気がするではないか。

一方で洗濯物を取り込もうとすると父と兄の洗濯物と私と母の洗濯物に間が少しできている。また、私には兄弟がいるのだが兄には明らかに母の言葉に苛つき、何気ない言動でピリついていた反抗期と思われる時期があったように思う。

兄の当時と今を比べてみるとまだまだその時の態度が抜けきっていないかったので、一番上の兄にも反抗期時のことを尋ねることにしたのだが、一番上の兄は「当時は自分の気持ちも家族の気持ちもあまりわからなくなってきたいて、どう接したらいいかわからず思ってもいないことを向けたり、暴言を吐いたり、家出をしたりと大変で、今でもなぜあんな事になったのかよくはわかっていない」とのことだった。このことから「親」と「子」の間で反抗期への認識や考えが大きく違うことがわかった。

だがそんな兄弟たちの反抗期もインターネットで調べた通り高校二年の中間くらいで何となくそれも落ち着いたように感じた。だが、私が気に食わないのは兄たちが反抗期だからしょうがないと言われて怒られる回数が少なかったことでも、女子は早く来るとかかれていたことでもない。

なぜ反抗期だとひとくくりにされてしまうのか。なぜその言葉で大人はやれやれと肩を竦めるのか。実際私は兄たちのようにはつきりと反抗期になっていないので、時代のことや感性、個性も相まって今はあまり私達が聞いていた反抗期の形は変わっているか、消えつつあるのかもしれない。だが私達はクローン人間で

はないし、周期的に規則的に親や大人の言葉に苛ついて反抗したくなるわけではないと思う。もちろん、頑張ったことを褒めてもらえなかったり、自分の気持ちをわかってもらえなかったりするとイラッとするが、そのくらいおとなになってもあると感じている。上司との関係や、世代の差などでそう思うことくらいいくらでもあるはずなのに、私達は年齢と時期や態度ですべてが決められて、私達の知らないところで私達自身が「反抗期」になっている事実がおぞましい。だが、家族というのは私達子供をそれなりに恐れていて、それなりに気を遣ってくれているのがわかることから、私達を「反抗期」というくくりに入れることで気を遣い、自分を安心させる材料にしているのかもしれない。まずは今のこの令和の反抗期がどのようなもので、どんな状況なのか今までの反抗期の認識を組み換え、おとなたちの考えからや常識の根本から正し、今の中高生を理解しようとする姿勢の必要があると思う。

佳作

「国際化を考える」

西中学校二年生 今井 優

私は座間市国際親善大使三期生の活動をしています。今年の夏に約二週間、座間市の姉妹都市であるテネシー州のスマーナ市に行ってきました。

私が親善大使になった理由は、英語が話せるようになりたいと思ったからです。また、国際親善大使の活動はこれからの人生に役に立つと思ったからです。国際親善大使とはスマーナ市と座間市を結ぶ架け橋となる人で、スマーナ市の人に座間市のことや自分のことを紹介したり、スマーナのことを座間市の人に知ってもらうたりする活動をしています。親善大使に任命された去年の七月から月一回の研修で、英会話の研修や、座間市を紹介するプレゼンテーションの練習などを行ってきました。

私はスマーナに行く前はホストファミリーやスマーナの生徒たちと交流するためには英語力が一番大事だと思っていました。しかし、英語力も大事でしたが、それ以上に「自分の気持ちを伝えようとすること」や、「相手の言っていることを理解しようとすること」が大事でした。私はそれほど英語が上手に話せないのですが、ジェスチャーや表情で伝えようと努力しました。ホストファミリーも私に伝えるために写真や実物を見せてくれ、伝えようとしてくれました。言葉の壁があっても「伝えたい」「知

りたい」という気持ちがあればお互いに歩み寄り、コミュニケーションが成立するんだと実感しました。また、ほかの大使がペアのスマーナ生徒と上手くコミュニケーションが取れずに困っていたとき、私やほかの大使、スマーナ生徒でその子たちが仲良くなれるようにサポートしました。その時も英語で会話をするだけでではなく、一緒に写真を撮ったり、買い物でお互いに興味のあるものを一緒に見るなどの方法で距離を近づけるようにしました。最初は笑顔が少なかったり、会話が少なかったりした二人でしたが、2、3日後には笑顔で会話をするようになりました。積極的にコミュニケーションを取ろうとしたことで、ホストファミリーやスマーナの生徒たちとの関係も深まり、充実した時間を過ごすことができました。スマーナに到着した日には不安でいっぱいでしたが、ホストファミリーにとっても親切にしてみらい、少しずつ不安はなくなりました。帰国が近づく頃には「もつとここにいたい」「ホストファミリーともつと一緒に過ごしたい」と思うようになっていました。最終日にホストファミリーが「優は私たちの家族だから、いつでもスマーナに戻ってきてね」と言って、ホストファミリーの住所を書いてある木製プレートをプレゼントしてくれました。私もホストファミリーのことを「スマーナにいる自分の家族」だと思っています。こんなふうに思えるようになったのは、私の未熟な英語を聞き取ろうと歩み寄ってくれたスマーナの人たちの優しさのおかげだと思っています。そして、自分が「英語があまり話せないから…」と後ろ向きになるのではなく、「なんとか伝えよう」と前向きに挑戦できたことも良かったと思っています。

来年の夏にはスマーナの人たちが座間市に来ます。その時には

私たちがしてもらったように、相手が言っていることを聞き取ろうとする姿勢を大切にして接したいと思っています。また、やはり英語力はあった方がいい、と感じたため、今まで以上に一生懸命研修や英語の学習に取り組んでいきたいと思っています。そのことが自分の成長につながるだけではなく、親善大使としての使命を果たすことにもつながると考えています。言葉や文化の壁をこえるために、勇気を出してトライすることは世界を広げることにつながります。私はこれからもトライを続け、自分の世界を広げていきたいです。

佳作

「リセットの合図」

西中学校三年生 齋藤 有壱

人見知りだから人と上手く話せない。本当はもっと友達と話したい、ふざけ合いたい、助け合いたい。でも、いざ話してみようって思ってもやっぱ声が出ない。

僕が極度の人見知りであると気づいたのは、中学生になってからだ。環境が変わったからか、まったく人と話せなくなった。小学生のときに仲の良かった人達も、別のクラスになってから話さなくなった。人ってこんなにも変わるんだ、小学校の時は全然話せたのに。

しかし、その中にはもちろん親友という存在もいる。親友は二人いて、中学校に入っても何の気遣いもなく話すことができる。たまに僕が一人の時に気にかけてくれたり、一緒にゲームをしたりしている。でも中学生の同級生にも、話しかけてくれる人はいらる。もちろんすごく嬉しいし、気にかけてくれるのは有り難い。でも、なぜか話せない。話の広げ方が分からない、もしかしたら否定されるんじゃないか、数秒の間にそんな考えが頭をよぎり言葉が喉に詰まる。

僕が初対面の人と話せないのにはいくつか理由がある。まず滑舌がわるいことだ。子供の時から苦手な発音がいくつかある。中学校に入ってからそれを言うのが怖くなった。くだらないことかもしれないけど、そう思うのにも理由がある。それは他人の目が

どうしても気になること。自分がどう思われているのかが分からないほど不安になっていく。それがコンプレックスになって重くのしかかる。見た目のこともそうだが、それ以外にも、普通の人とは違った感性をもっていることもある。やっぱ僕はおかしい。普通の人とは違うという怖さもあつてか、人と話せないのだ。

授業だってそうだ、特に体育ではチーム協力が必須となる。僕は運動もできないし協力もできないから体育が嫌いだ。でも参加しないと成績を下げられる。楽しそうにやらないと成績は上がらないのだろうか？どうせチームと協力しろだとか、友達と仲良くしろだとかそういうことだろう。

無理やりつくった友達は、本当に友達と言えるのだろうか。僕はその人と楽しく話せる気がしない。友達というのは沢山いればいい訳ではない。自分が楽しいと思えないなら友達として成立しない。別に友達なんていなくてもおかしくない。ただ同じ年に同じ学校の同じクラスで一緒になっただけ。だから仲良くなれなかったって問題はない。それなのにどうして友達をつくらせようとするのだろうか？それは気遣いのフリをした無茶振りだ。だから僕は友達ができない。みんな同じように見える、本当ならこの中に僕が話すべき人がいるはずなのに、会わなきゃいけない人がいるはずなのに、人が多いと話せなくなる。

僕は自分自身が嫌いだ。気分が悪くなることも少なくない。死にたいとか、消えたいとか、何度も思ったことがある。でもそう思った時はとある人達に元気をもらっている。

それは、大好きな四人組ゲーム実況者グループだ。その人達とはとても面白く、気分が悪い時に見ると気持ちが悪く落ち着く。明日も頑張ろうと思える。その人達のおかげで生きてこられたといつて

も過言ではない。その人達は僕の将来の理想像だった。

僕の人生への夢は、そんな人達と共に人生を歩むことだ。自分と同じ気持ちの人を救いたい。今の親友二人なら、そんなことも夢じゃない。もしそれが叶うのなら、僕はそれに人生を捧げようと思う。だから今努力するのだ。ネガティブだった心をポジティブにして、苦手な発音も練習して、身だしなみを整えたり、初対面の人と話せるよう一生懸命努力している。でもやっぱり全部うまくいくわけではない。自分を傷つけてしまったり、言葉が詰まってしまうたり、突然涙が出てきたりする。そんなときは「沢山泣いてもいいから、泣き終わったら切り替えをする」それを自分のモットーにしている。両手で頬を軽く叩いて「切り替え大事」と唱える。それが僕のおまじないであり、リセットの合図だ。

佳作

「これからの人生を創る」

西中学校三年生 中村 太亮

みなさんは残りの人生をどう過ごしたいですか？家族、彼氏・彼女・友達と過ごしたい人もいれば、一人で楽しみたい人もいると思います。僕は残りの人生をやりたいことに注ぎ込めるようにしたいです。

人生は自分で楽しむことができると思います。いつでもどこへいこうとか、これをやってみようとか、チャレンジしていくことも大切だと思います。僕は親に小さい頃から色んなところに連れて行ってもらい、いろんなことを体験させてもらいました。僕はやる前からやりたくないと言うタイプなので誰かに連れて行ってもらわないと基本的に何もやらない性格でした。

そんな僕がこれからいろんなことをしたいと思うようになったきっかけはテレビ番組「クレイジージャーニー」に出ていた写真家竹沢うるまさんでした。その時の特集が世界最北の村シオラパークに行くというものでした。シオラパークは気温が-30℃くらいで、基本的に外が冷蔵庫みたいな厳しい環境でした。そのなかでも竹沢さんはこの環境を楽しみ、見たことない現地の食材をカレーにして食べるなどしていて、すごく楽しそうでした。行ってみたいと思うようになりました。

竹沢さんは基本的に、いろんなことをやってみようと思うタイ

プで、自分とは結構反対な性格でした。でも自分はそのときにやる気が出て自主的に色々な国を調べるようになりました。

僕は調べていくうちにイギリスに行きたいと思うようになりました。イギリスはロンドンやマンチェスターなどの都市夜景がよかったり、郊外に行くと山などがあつたりしていて、都市と自然両方兼ね備えている、魅力的な国でした。しかもサッカー観戦したい僕にはピッタリの国でした。この国に僕は高校卒業したら友達と行こうという話をしました。

竹沢うるまさんはこんな言葉を言っていました。「本当の美しさ。本当の言葉。そして本当の光を見つめて生きていたい。」極地に赴く写真家ならではの発言だと思います。でもこれは僕が望む人生そのものを表していると思います。自然が作り出すほんとうの美しさを見たい、生き物が発する、嘘がない本当の言葉に触れてみたい。そんなもので世界があふれる、本当の地球を見たい。そんな人生の夢が僕にはあります。

人生は一度の選択で崩れたり、変わったりすることが多くあります。他の人に言われてからなにかするのではなく自分から探求し探し行動することで人生をより豊かにすることができます。ただ旅行をするのではなく、その国にある本当の価値を見出すことやその住民とコミュニケーションをとることは、どれも簡単なことではなく難しく、勇気がいることだと思うけれど、そこに本当の価値があり、人生の本質がわかると思います。疲れたら休む、無理だと思ったら引く、できそうだったらやってみる。ただ人生のトリセツ通りに動くのではなく自分で変化を加えることが一番大切だと思います。

最後に、僕にはこれからやりたいことが百個以上あります。自

分で調べたり、何があるのかを動画を見たりして夢を膨らませていきます。世の中には嘘だらけというぐらいでかいもの、きれいなもの、すごいものがたくさんあります。みなさんもこれからやってみたいことはありますか。悔いのない人生を過ごしてください。

佳作

「挨拶」

東中学校二年生 華山 彩結

「おはようございます」

「こんにちは」

「行ってきます」

「はじめまして」

「ありがとうございます」

私達が普段当たり前にしているであろう挨拶。挨拶はどうしてする必要があるのだろうか。

私は、生徒会の活動の一環として月に一週間、登校してくる生徒に挨拶を行う「おはようボランティア」通称おはボラという活動に参加している。最近では自ら活動に参加してくれる生徒が増え、やりがいを感じている。

だが、その多くが友達のように挨拶をしたり、ただ大きな声で挨拶をするだけで、挨拶の意味や大切さは自分も相手も、理解できていないように感じる。加えて小学校でも、中学校でも「挨拶は大切」と教わってきたが、いくら挨拶活動をしていても、いくら大切と教わっても、どうして大切なのかを教えてくれる人はそれほど多くはない。挨拶はなぜ大切なのだろうか。

私が中学一年生の時、いつも一緒に登校していた友達が部活の早朝練習に行く関係で、私はいつもより遅い時間に一人で登校し

ていた。すると、私を見かけた見知らぬ女性が「おはよう」と挨拶をしてきた。私は突然のことに戸惑ってしまい、挨拶を返すことができなかった。

その女性は次の日も、次の日も、私に挨拶をしてくれた。私は挨拶を繰り返すうちに、この人は私を見てくれていると感じるようになり、最初は会釈程度の挨拶だったのが、次第に「おはようございます。」と挨拶を返すようになった。すると、その女性も私が普段と違う様子だと声をかけてくれたり、体育祭などの行事の際には挨拶だけでなく、「頑張つてね」と私を気遣った一言を添えてくれるようになった。また、下校時も「おかえりなさい」と挨拶をしてくれる顔見知りのような存在になり、毎日の登校時や下校時にあの女性と会うのが楽しみとを感じるようになっていた。すると私のなかでこの女性との挨拶は、感謝の気持ちや出会えたことへの喜びを示す言葉となっていた。

それが故に、挨拶は一度習慣がつくと、返してくれるということが当たり前になってしまう。

おはボラをしていても、挨拶をしてくれない人や、前の私のように会釈だけで済ませてしまう人などがおり、私が感じた楽しみや喜びが失われてしまうような気持ちになった。では、どうして挨拶をしても返してくれない人がいるのだろうか。

それは、挨拶をしてくれた相手と赤の他人であり緊張してしまったり、もしかしたら挨拶をされたのは自分ではないかもしれないと感じる人がいるからなのではないだろうか。けれど、挨拶を続けることで私があの時感じたように、私に挨拶をしてしてくれる、この人に会うのが楽しみだと思ってくれる人がいることを、私は知っている。続けることが、何よりも大事なことである。

私達が普段、当たり前のようにしている挨拶には、感謝の気持ちを伝えたり、出会えたことへの喜び、存在の証明など人が生活するために必要な思いが詰まっている。だから挨拶は大切で、今までなくなることなく存在し続けたのだろう。

「おはようございます。」

私はこの言葉を言い続ける。あの女性のように、挨拶の大切さに気づかせることができる、そんな人になるために。

佳作

「その一瞬を駆け抜ける」

栗原中学校一年生 土屋 美月

On your marks (オン・ニア・マークス)、Set (セット)、号砲と共に、走り抜く。スタートして30m、私は誰にも負けない。中学生になり、私は、学校生活の部活の中で自分に自信を持つことを探しに陸上競技部に入った。この選択は間違いでなかったと確信している。

陸上競技部は、走るだけではない。基礎トレーニングも沢山する。先輩達が一つひとつ教えてくれた。毎日の練習はとてもハードで、家に帰る頃には一日の疲れがピークに達しているが、そこには今日一日の充実感がある。

六月から大会シーズンが始まり、100mに出場した。初めての座間市の大会で一年生の大会新記録まで0.03秒足らず、悔しさが残った。

県央予選大会では、スタート40m、誰にも負けなかった。60m地点で後ろから抜かされる瞬間焦った。一気に抜かされ、組二位となったが、県大会へ行くことができ、まずホッとした。その後、ようやく、ぐっと込み上がる喜びを感じた。

六月末と七月に県大会があった。当日は、出場選手しか練習できず、チームでのアップはない。初めての事ばかりで、二年生の

先輩と一緒にメニューを考えてくれた。心がなんだか温かくなった。六月末は足が上がらず、踏み込む事ができなかったため、私のスタートは出遅れた。

七夕の短冊に「県指定強化選手になる！」と目標を込めた。

七月の県通信大会では予選の後、先生から決勝に残れると言われ、一瞬びっくりしたが、嬉しかった。召集後、決勝では一人ずつ紹介されるため、みんなでポーズを考えた。昔は苦手だったこの時間が、自分なりのリラックسوと、レースに臨む準備ができるようになっていた。走り切った後、勇気を出して速かった仲間に、走る「コツ」を聞いた。陸上は個人競技ではあるが、良いところを話しあい、お互いに高め合う事ができるいい競技だと思う。ついに目標であった標準記録を、突破した。

夏の練習では、スタートの「コツ」をみんなで話して研究した。

一年生も、教わるだけでなく、中に入っていけるようになった。

残るは、八月の座間市中学校体育大会だった。学校対抗の結果が分かるまで、みんなでドキドキした。私が走った競技も7点を貢献した。ゴールした瞬間、フィールドで競技中の仲間が飛び跳ねて喜んでくれて、嬉しかった。リレーでは、バトンを繋いで走り切れた。最後の総合結果発表になると、会場が静まり返った。手を握り、結果を待った。

「第一位、69点、栗原中学校。」

拍手と同時に、何度も何度も喜びの気持ちを声にした。全員で勝ち取った優勝だ。この気持ちを忘れずに、来年も優勝したいと思った。

入学して七夕の短冊に書いた一つ目の目標を達成した。私は、更に三つの目標を見つけ、挑戦する。

一つ目は、後半も落ちない走力を取得すること。来年は、全国標準記録を突破したい。成果が出る事を信じて基礎練習を継続する。

二つ目は、リレーで勝ち抜くこと。リレーは一人、一人の走力だけでは、結果は分らない。バトンパスは、前の走者を信じて走り出し、「ハイ」の掛け声で、バトンを貰う。一人ずつの速さに加え、このバトン練習をすることで、タイムを大きく縮められる。400mリレーは、「四継」とも言うそう。私は、どんな順位でバトンを貰っても、必ず順位を上げて繋げたい。

三つ目は、陸上だけでなく、学校生活でも「友達」、「仲間」と、楽しく、助け合い過ごすこと。これが一番大事な力の源だと考える。

もっと挑戦してみたい。チャレンジする自分であり続けたい。

佳作

「障害者を当たり前に支える社会の実現」

栗原中学校二年生 グレアム 紗里

私は先日祖母と一緒に電車に乗る機会がありました。私と祖母が座った席は三人席でしたがその向かいの席も含めて優先席ではありませんでした。最初は空席が目立ちそれほど混雑ではありませんでしたが、電車が進んでいくと次第に混雑し、私たちの席の前にも人が立ち始めました。そんな中一人の障害を持たれた方が私たちの向かいの席の前に乗車し、立たれました。その方は片足を少し引きずるように歩かれ、優先席ではない座席には三人の乗客が座られていました。混雑した車内で、その方は手すりにつかまり、電車は動き始めました。その方が立たれた前の席に座っていた乗客の三人は、明らかにその方が障害を持たれていると気づいていたと私は感じました。なぜならその方はかばんに真っ赤なヘルプマークをぶら下げていたからです。そのヘルプマークは向かい側に座っている私にも確認することが出来ました。ヘルプマークとは、外見からは分からなくても援助や配慮を必要としていることを知らせることで、援助を得やすくなるように作成されたものです。私は実際に見るのは初めてでしたが、以前学校の授業でその事を学んだことがありました。三人の乗客の方たちはそれぞれ思い思いに下を向かれたり、目をつぶられたりして、そ

の方に席を譲ることはありませんでした。もちろん優先席であれば、少し行動はちがっていたかもしれませんが。そんな時私の隣に座っていた祖母が何人かの乗客の間をすり抜け、後ろからその方の肩をポンポンとたたき「お座りください。」と声を掛けました。その方は振り向き、「ありがとうございます。」と言いながら私の隣に腰かけました。電車は進み、その方は私たちより先に下車しましたが、降りる時に、私の祖母に向かって笑顔で「ありがとうございます。」と言いました。大変助かりました。」と言っていたのがとても印象に残っています。私の祖母は福祉の仕事をしているので、祖母にとっては当たり前の行動だったのかもしれませんが。このちょっとした出来事で私が思った事は、もし私の前にその方が立たれていたら、私はすぐに声掛けをして席を譲ることが出来ていただろうか、ということでした。何となくそうしたい、そうしなければならぬと思うていても、実際にそれを行動に移す事は簡単にできることではないのかもしれないと思います。

この事をきっかけに、私はヘルプマークについて少し調べてみることにしました。外出先で見知らぬ人が困っていたら手助けをするか、という各種調査の結果、手助けをする気持ちがあっても実際には手助けしない、できない。どのような手助けを必要としているのか分からないという意見が多数を占めたそうです。確かに障害や病気などの心身の状況や手助けの必要性が外見では判断しにくい人もいます。そのような状況を受けて作成されたのがヘルプマークだそうです。しかし今回の事で現実はそのヘルプマークをつけていてもヘルプを受けられずに困っている方たちが私たちの周りにはいる事を知りました。障害を持たれている方たちが当たり前前に支援を受けられ、健常者と共に、生活できる社会

の実現に向けて、今の私にできることは何なのか考えた時、障害を持たれた方たちのためにできる支援は身近にたくさんあることに気がつきました。まずはそのような事をしっかりと学び、私も今後同じようなことがあったとき、思いと行動を一致させ、ほんの少しの勇気を持ち行動に変えていきたいと思います。色々な障害がある方たちが、少しでも社会の中で暮らしやすい環境になるように、自分のできることから行動に移していきたいと思っています。そして障害のある人を当たり前に支えられる社会の実現に向けて進んでいきたいと思っています。

佳 作

「過去を忘れず未来を守る」

栗原中学校三年生 保延 由花

八月十五日、日本は第二次世界大戦の終戦から七十九年が経ちました。この日を迎えるまで、あの時代を生きた日本人たちは何を体験し、何を思ってた生きてきたのでしょうか。

私は八月十五日の朝、ニュースを見ていました。ニュースでは、戦争についての特集がたくさん放送されていました。その事をきっかけに第二次世界大戦について調べてみました。調べた中でも「特攻隊」の話がとても衝撃的で、自分が平和のために何ができるのかをとても考えさせられました。

特攻隊とは、敵の艦船や軍の施設に向けて自らの命を捧げ、一撃で大きな被害を与えようとする部隊のことです。日本の特攻隊は、敵の艦船に向けて搭乗機で突っ込む「神風特攻」を主な活動としました。

特攻隊員たちは、若い学徒や学生、若い兵士たちから選ばれていました。中には、私たちとほとんど変わらない年齢の人たちも特攻隊員だったそうです。自分と同じくらいの人々が戦争に行くなんて、本当に信じられないです。

特攻隊の一番の特徴は、命を捧げる覚悟を持っていたということです。だと思います。特攻隊員たちは、自らの命を犠牲にしても国

や家族、仲間たちを守ろうとする姿勢を持っていました。彼らは、特攻隊の一人として戦闘機に乗り込み、敵の船や施設に突撃しました。その行為はまさに「死を持って国を守る」というものであり、私にはとてもできない行為だと感じました。それと同時に、特攻隊の人たちはどのような気持ちで参加したのかがとても気になりました。

特攻隊に参加することになった人たちの多くは二十代前半やそれよりも下の年齢の男性でした。彼らは、自分たちが家族や故郷を守るために必要な犠牲だと信じていましたが、それでも恐怖や大きな悲しみを感じていたのではないかと私は思います。実際に、特攻隊員が両親や兄弟、友人に宛てて書いた手紙や日記には、自分の運命を受け入れつつも、未来への不安や残された人たちへの思いがつつられています。特攻隊員の多くは、国を守るための強い意志や使命感を持っていた一方で愛する人たちと別れることの悲しみも感じていました。

戦後、日本は戦争についての悲劇を振り返り、特攻隊の存在も深く考えるようになりました。特攻隊が多く命を犠牲にした一方で、その作戦が戦争の結果にどのような影響を与えたのかについてはいくさんの賛否があります。ですが、どちらの意見にも共通することは、「この重大な出来事を忘れずに未来へ語りつぐべきだ」ということなのではないでしょうか。そして私は、「二度と戦争を繰り返してはいけない」と強く思います。

では、現代を生きる私たちが二度と戦争を繰り返さないためにできることはあるのでしょうか。まずはここににいるひとりひとりが「平和な世界をつくりたい」という意識を持って生活することが大切だと思います。ですが、戦争という大きな問題を一人で解

決することは難しいです。そんなときは今、あなたの近くにいる人たちに助けを求めてみてください。一人で解決することが難しくても、すこし勇気を出して、「平和な世界をつくるために私たちができることはあるかな」と聞く。その行為こそが平和な世界をつくるための第一歩です。この小さな一歩が、座間市、神奈川県、日本、世界へと広がり、全ての人たちが平和に生活できるようになることを強く願います。

審査を終えて

審査委員 田附 和枝

「座間市中学生の主張作文コンクール」は、四十四回目を迎えました。

今年の応募作品については、次の九つの課題に対して、応募総数一三二七点の作品が寄せられました。

- 一 私たちと環境保護
- 二 命を考える
- 三 私が社会や他人のためにできること
- 四 私の学校生活
- 五 私と家族
- 六 こんな大人になりたい
- 七 私の人生への夢
- 八 ネット社会に生きる
- 九 身近な国際化を考える

その中から本作品集には、市長賞、議長賞、教育長賞、佳作に選ばれた全十作品を掲載しました。

受賞された皆さん、おめでとうございます。ご家族をはじめ、先生方や生徒の皆さんには、ぜひ、ご一読いただき、作品の素晴らしさを実感していただきたいと思います。

以下、審査の感想や所見のまとめを紹介することで、選評とします。

『私たちと環境保護』には、SDGSの観点からフードロスの削減や節電・節水などについて書かれた作品がありました。まず筆者自身がフードロスの食材を使った献立を子どもたちに提供するボランティア活動を行っていることに感心しました。古着をバザーに出したり、野菜や食器の溜め洗いをしたりと家庭の中で身近なことから始めていくことの大切さを主張していました。

『命を考える』には、第二次大戦のあった過去を忘れずに「平和な世界をつくるために私たちができることはあるかな」と周囲に相談することの大切さを訴えた作品がありました。特攻隊について詳細に調べたこの作品には、筆者と同じ年代が「死を持って国を守る」という強い信念で亡くなっていくことに大変心を痛めて、「二度と戦争を繰り返してはいけない」と強く願う気持ちが感じられました。

『私が社会や他人のためにできること』には、祖母と一緒に乗った電車の中での実体験を基に書いた作品がありました。その中で見たヘルプマークについて調べ、そこから「少しの勇氣をもって行動にかえていきたい」と考え、「障害のある人を当たり前に支えられる社会の実現に、向けて進んでいきたい」と強い気持ちをもって主張していました。

また、生徒会活動の一環で「おはようボランティア」通称「おはボラ」という挨拶運動に参加している筆者が、挨拶の「意味」や「大切さ」を問い直す作品がありました。登校途中で出会った女性から「挨拶」をされたことから、本当の意味での挨拶を次第に知っていく。最後に「挨拶の大切さに気づかせることができる」と結論づけていく文章

構成が見事でした。

『私の学校生活』には、中学生になり初めて陸上競技部に入部した筆者の熱意が感じられる作品がありました。「毎日の練習はとてもハードで家に帰る頃には一日の疲れがピークに達しているが、今日一日の充実感がある」と良き先輩たちに恵まれて活動していることが読み取れます。目標に向かって努力する姿が手にとるようにわかる文章です。

『私と家族』には、「なぜ大人たちは反抗期という言葉で子供たちをひとくくりにしようとするのか」と、独自の視線で書かれた作品がありました。兄弟たちの反抗期の様子を交えながら「私たちは年齢と時期や態度ですべてが決められて、私たちの知らないところで私たち自身が『反抗期』になっている事実がおぞましい」と嫌悪感をむき出します。時代によって反抗期のかたちは変わっていくのか。筆者が言う令和の反抗期とはどのようなものなのか。読んでいる大人が考えさせられる作品です。教育長賞を受賞しています。

『こんな大人になりたい』では、近所の人に自分から挨拶をする筆者の姿から始まります。挨拶は大切なコミュニケーションの一つだと理解している筆者はとても素晴らしいです。義務教育をあと半年ほどで終えようとする十五歳の、今の心境を実に客観的に書き進めています。終末では「年齢や経験を逃げ道にせず、自分のことは自分で判断して行動できる大人、自立し自律できる大人になっていきたい」と結び、読み手側の大人が「はっ」とする主張で締めくくられています。議長賞を受賞しています。

『私の人生への夢』には、学校の中ではどうもうつむいているらしい彼が、この主張作文の中で自分の心の中を爆発させたという作品がありました。とても人見知りな彼は、自分自身を分析してなぜ人見知りなのかその理由を探ろうとします。「両手で頬を軽く叩いて『切り替え大事』と唱える。それがぼくのおまじないであり、リセットの合図だ」となるとも彼の様子が目に浮かぶかのような表現でとても印象的です。

『ネット社会に生きる』には、ネットに依存してしまうことへの危険性を述べた作品がありました。メッセージアプリへの投稿を見たとき「名前も知らない他人に依存してしまうの？」と恐怖を感じた筆者。「ネットにのめりこみすぎてネットだけを頼りに生きてしまうようなことはあってはならない」と主張する姿勢に共感しました。

『身近な国際化を考える』には、今夏座間市の国際親善大使として、スマーナ市に二週間滞在した経験を基に書かれた作品がありました。言葉や文化の壁を一生懸命乗り越えようと奮闘する姿が表現されていました。ホストファミリー宅でジェスチャーや表情で伝えようとする姿をつい想像してしまい、頑張つてとエールを送りたくまりました。来夏にはスマーナの人たちが座間に来るため「英語の学習に一生懸命取り組んでいきたい」と意欲を示す筆者の頼もしさを感じられる作品でした。

市長賞には、相模中学校3年生の高橋遼馬さんの「振らないバットは当たらない」が選ばれました。

なんとも印象的な題名です。学級委員の任期が終わったと思ったら、今度は選挙の応援責任者を任されてしまったという作品です。「想像を遙かに上回る激務」「体には相当堪えた」など選挙活動の大変さが感じられます。応援演説の場面では、「緊張」よりも「闘志」と「自信」が芽生えたと述べます。一つ一つ大きな責任を果たしていく中で人は成長するのだと実感できる作品でした。後半、学校での多くの役割が「推薦」によって任されていくことに疑問を投じています。大人の都合主義に対して鋭い視線で主張している作品で、考えさせられます。

読んでいて気がついたところ、工夫がほしいところをまとめてみますので、今後の参考にしてください。

一 課題に沿って自分の考えをしつかりまとめることが大切です。特に最後の表現を工夫しましょう。

二 自らの体験を通して考えたことや分かったこと、今後への目標などを簡潔に表現すると訴える力が強くなります。

三 提出する前に推敲することが大切ですが、他人に文章を読んでもらうことも効果的です。

なお、応募にあたり、熱心にご指導くださいました、各中学校の諸先生方に、深く感謝申し上げます。

審査員（敬称略・順不同）

矢田 千恵（西中学校 総括教諭）

安達 誠（東中学校 教諭）

長島 千穂（相模中学校 教諭）

田附 和枝（教育指導課 主事）

林原真由美（教育研究所 教育相談員）

平田 理絵（青少年センター 青少年育成指導員）

寺田 栄枝（青少年指導員協議会 青少年指導員）

丸尾 博子（青少年指導員協議会 青少年指導員）

桑畑 武（青少年指導員協議会 青少年指導員）

第四十四回（令和六年度）座間市中学生の主張作文コンクール入賞者作品集

中学生の主張

（令和六年十一月発行）

編集発行

座間市青少年問題協議会

〒252-0023 座間市立野台一丁目一番四号

座間市こども未来部こども育成課（青少年センター内）

電話 〇四六（二五三）八四一五



シンボルマーク

（制定 平成 3 年 4 月）

座間市の頭文字「Z」をモチーフにしつつ、中央のラインは市内を流れる川を楕円は太陽と市の豊かな自然をそれぞれイメージしました。

21 世紀に向かって“みなぎる活力とやすらぎが調和するときめきのまち”の実現をめざすシンボルとして制定されました。